

# 私たちが考える万博

第3回 新「万博時代」をどうつくるか

## 「上町台地今昔フォーラム」で得られた成果

「私たちが考える万博」連載第1回では、これまで大阪で行われた博覧会の背景を考察し、万博が都市・産業戦略の一環として開催されてきたことを明らかにしました。

第2回は「大阪・関西万博2025に盛りこみたいもの」として、史上No.1の万博「超万博」に向けた五つの考え方を提示し、一過性イベントに終わらせない、次世代に夢と力を与える万博を目指そうという願いも掲げました。

これらを踏まえ今後、「どう行動していくのか」を考えていくこととなりますが、今回は昨年CELが催した「上町台地今昔フォーラム」関連イベントの報告を交えてお話ししたいと思います。

フォーラムは「映像&トーク 1900年パリ万博から、大阪・関西万博後の百年へ上町台地を視点場に、都市と博覧会の世

大阪・関西万博開催まであと5年。新しい万博の時代を迎える私たちは、どのような未来を描くことができるだろうか。池永寛明大阪ガス(株)エネルギー文化研究所(CEL)顧問と共に、大阪・関西万博をテーマにしたイベントなどを通じて、考察を重ねていく。今回は、大阪・関西万博をテーマにした「上町台地今昔フォーラム」に対する池永氏の所感と、イベントのレポートをお届けする。

構成 加藤しのぶ

紀をレビューする」と題し、都市と博覧会を再定義し、未来へとつなぐ試みの場となることを目的に開かれました。

プログラムは3幕構成。第1幕では、CELの弘本由香里研究員が映像資料を駆使し、1900年のパリ万博、さらにその後の1903年第5回国勧業博覧会から1925年の大阪記念博覧会を経て1948年の復興大博覧会へと続いた、近代都市の形成と戦災と復興の歩みをレビューしました。

第2幕は、古川武志大阪府史料調査会調査員に登壇いただき、大阪で開かれた博覧会が持つ意味や、それが都市がどのように向き合ってきたかについてお話しいただきました。

続く第3幕では、私と古川氏、そして大阪大学大学院博士課程の学生である山蔦栄太郎氏の3人で鼎談を行いました。山蔦氏は機械工学分野のバイオ応用研究を行う学生であると同時に、ナレッジキャピタルで立ち上げている「大阪・関西万博会議」ワイガヤサロン

出や、当時の空気感から想起されたと思われるポジティブな記述が多く見られました。対して後者は「平和」「環境」「高齢社会」など、社会的課題に対しての「なんとかしてほしい」という思いが感じられるネガティブな回答が多かったのです。

過去の万博に明るいイメージを抱きながら、新しい万博後の未来には悲観的ともいえるイメージしか抱いていない。私はこの落差に、大きな衝撃を受けました。「こんな日本で万

博をやってどうするのか？」という、リアルな声が聞こえてくるようです。この状況では、「万博で何をやるか?」「どんなパビリオンをつくるか?」を考えるどころではありません。閉塞感が大きく、適合不全を起している現代日本の社会状況で万博に臨むにあたって、何から考えるべきでしょうか?

まず、現在から大阪・関西万博、そして万博後という時間軸のなか、新「万博時代」のイメージをどうつくっていくか、それに対して知恵を結集させるべきでしょう。そこでポジティブなイメージを生み出すことができれば、万博への期待も自然と高まっていくはずです。70年万博のように、その時代を生きる人、ことに若い世代の人びとにとって、「万博があつてよかった」「この時代に生きてよかった」と思える新「万博時代」の機運をつくるのが、何よりも重要だと思っています。

## 新「万博時代」の機運をつくりだしていくために

少し話が飛びますが、私は、「大阪は巨大な縁側である——大阪縁側論」を考えています。外国人観光客が大阪の街を「心地よい」というのは、内でもなく外でもない「縁側」のような場所と感じるためではないかと思うからです。これまでさまざまなものを受け容れ、混じり合わせながら「日本的なるもの」を生み出してきた大阪、内と外をつなぎ新しいものに変換していくことに長けた大阪という「大阪縁側論」を背骨に、新「万博時代」前史5年の先駆けとなる本年、さらに議論を深めていきたいと思っています。

また「上町台地今昔タイムズ」では、博覧会時代の「モダン大阪に煌めいた若き才能たちの光跡」と題し、博覧会時代を駆けた人物をクロージアアップしています。これまで万博は都市戦略・産業戦略であるという話をしてきましたが、その中心にあるのは「人」であるということ忘れてはいけません。これに関連したイベントなども予定しています。



フォーラムでの鼎談の様子。左から古川氏、山蔦氏、池永氏。



第五回内国勧業博覧会の全景図。左上に描かれる釣鐘は、博覧会に合わせてつくられた四天王寺の大釣鐘。



池永寛明

いけなが ひろまさ

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに関わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所所長に。2019年より現職。



大阪の博覧会の歩みにまつわる弘本研究員の解説に、会場の参加者は興味深く聞いた。

博と、さらにその後の百年を見るか、再起動すべきものは何なのか、都市と博覧会の世紀をレビューする」イベントが、2019年9月28日、大阪ガス実験集合住宅NEXT 21にて開催された。

会場正面には大きなスクリーン、その両脇の壁にも小さなムービーでこれまでの上町台地を舞台にした博覧会の様子が映し出される。タイトルやプログラムに「レビュー」とうたっている通り、講義というよりショーを楽しむという場づくりがなされており、期待感を誘っていた。

### 大阪が歩んできた博覧会の歴史を読み解く

まず1900年にパリで行われた万博の映像を映しながら、弘本由香里研究員による解説から幕を開けた。映像から伝わる当時の人びとが受けたであろう衝撃をも追体験してもらおうという演出である。

続いて舞台を日本に移し、都市が舞台となった1903年第5回内国勸業博覧会、それを経て1925年に開催された大阪記念博覧会、さらに第二次世界大戦後焦土と化した大阪の地で1948年に開かれた復興大博覧会について、映像資料を駆使した解説が行われた。なかでも復興博の「その後」の説明や、復興博とその前の大阪博は毎日新聞社が主催したものであったという解説を特に興味深く聞いた。

続いて、古川武志大阪市史料調査会調査員

に報告する際のプレゼンターを務めたそうだが、鼎談は池永氏の主導により、「まず、万博ってなんだろう？」という問いかけから始まり、「あなたにとって、都市と博覧会とは？」について、事前に記入を求められていた会場参加者のアンケート結果なども交えながら、活発な意見が交わされた。なかでも、70年万博の時代を経験していない山蔦氏が万博を翌年に控えた上海を訪れた際の経験から、「新しい文化、新しい意識改革が進んでいくところを目の当たりにし、万博というのはすごい力を持っているのだなと素直に思った」と語り、「いろいろな情報が手に入る時代だ

からこそ、生でほかの人たちと一緒に体験することの価値があがっている。万博といった体験の価値も高まっているのではないかと話したのが印象に残った。

その後1〜3幕を通した感想として、会場の参加者からも多くの声があげられた。実家が第5回内国勸業博に出店していた方の話や、70年万博に参加した方の思い出などのほか、毎日新聞社の方からは、大阪博と復興博を主催したのが自社であったことにふれ、当時の新聞社には自治体などと共に新しい社会を作っていくという姿勢が常にあり、マスメディアとしてのありようをあらためて考える

による『大大阪』へのグラントデザインと、都市戦略としての博覧会の過去を読み解く。時代により変わる都市の役割について、博覧会を軸として講演された。

大阪の近代史料を調査し、大阪の大衆文化にも詳しい古川氏によれば、「大阪の人は案外大阪の歴史を知らない」そうである。たとえば、天王寺公園が第5回内国勸業博覧会の跡地だとは知っていても、その実際の内容やなぜそこで行われたのかなどについてはよく知らないという。そういった、実は知らない博覧会の経緯を解説しながら、それぞれの博覧会の成果は都市の遺産として残され、現代につながっていると話した。

また各博覧会のテーマは常に未来を展望するものであったとし、次の2025年の大阪・関西万博のテーマがどういう方向になるかを決めるのは我々の眼差しであり、自分の問題として考えることが大切とまとめた。

### 2025年とその先を見据え大阪万博を考える

最後は「2025年大阪・関西万博とその後の百年に向けて、都市と博覧会を再定義する」をテーマに、鼎談が行われた。

登壇者は、先の古川氏、池永寛明CEL顧問、大阪大学大学院工学研究科で機械工学を専攻する山蔦栄太郎氏である。山蔦氏は、池永氏が座長を務める「大阪・関西万博会議「ワイガヤサロン」」の若きメンバーでもあり、そこでの議論をまとめたものを万博関連組織

きっかけとなったとの話などが聞かれた。

最後に池永氏により、百年後の社会に思いをはせながら2025年を考えていきたい、今後自分ごととして議論を続けていきたいとの言葉で、締めくくられた。

立ち見がでるほどの参加者で盛況となったフォーラムだった。しかし、アンケートの記述からみる2030年に向けた展望は決して明るいものではなく、万博への前向きなイメージを抱けていないのが現状でもある。古川氏や池永氏の話にもあったように、今後万博を「自分の問題」としてどう考えていくかが肝要となってくるであろう、と感じた。



大阪の博覧会と都市の関係をテーマに講演する古川氏(上)。「社会を変える力が万博で生まれてほしい」と語った山蔦氏(下)。



「上町台地 今昔フォーラム」の詳細なドキュメントレポートは、CELホームページ上で公開している。(http://www.og-cel.jp/information/discussion/1284152\_16384.html)